

# ネットワークアンケート ④6

糖尿病ネットワークを通して

医療スタッフに聞きました

## Q. 糖尿病患者さんに、熱中症に対する指導や注意喚起を行っていますか？

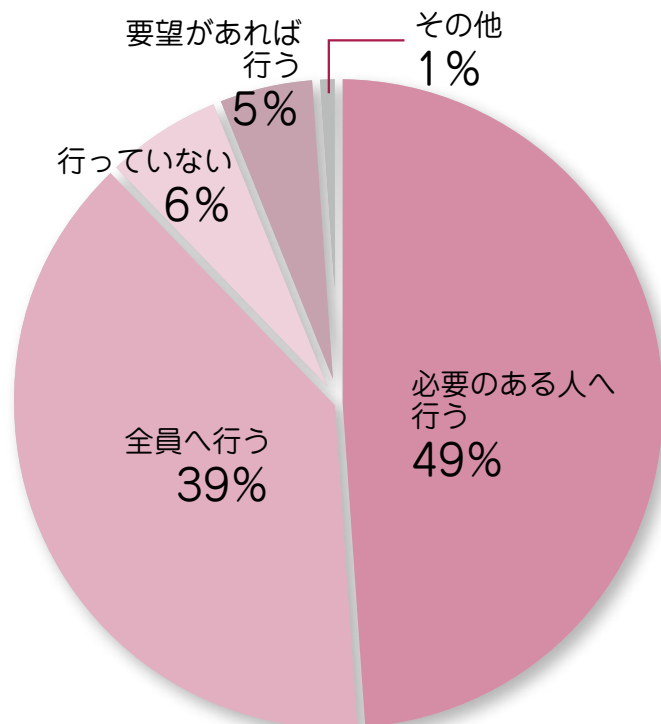
今年の夏も猛暑でした。今年、本邦で世界初の診療ガイドラインが発行された熱中症。糖尿病があると熱中症を発症しやすいと言われますが、糖尿病患者さんに対する熱中症対策と対処のしかたについては、意外と周知がなされていないのではないのでしょうか。患者さんの認識とともに、実際どのような指導、対策が行われているのか伺ってみました。

[回答数：医療スタッフ108名(医師17、看護師39、管理栄養士26、薬剤師23、臨床検査技師3。うち日本糖尿病療養指導士28、糖尿病看護認定看護師3)、患者さんやその家族386名(病態/1型糖尿病119、2型糖尿病242、境界型16、その他8、治療内容/食事療法275、運動療法233、経口薬203、注射薬20、インスリン療法212/重複回答あり)]

熱中症に対する指導は「必要のある人へ行う」との答えが最も多く半数で、「全員へ行っている」としたのは約4割でした。一般的に糖尿病患者さんは熱中症にかかりやすいと言われますが、実際のところそう「感じている」と答えた人は22%、「かかりやすいだけでなく重症化しやすいと感じる」が32%、一方で45%が「健常者と変わらない」と答えています。特に対策が必要だとしているのは「高齢者」で97%、「外での作業が多い人」76%、「ひとり暮らしの人」75%、

「SGLT2阻害薬を処方されている人」74%とのこと。対策として夏場の運動療養は、93%が「朝晩の涼しい時間帯に行く」よう指導していると答え、外ではなく「室内で行う」、「運動内容を変える」などの工夫を勧めていることが多いようです。

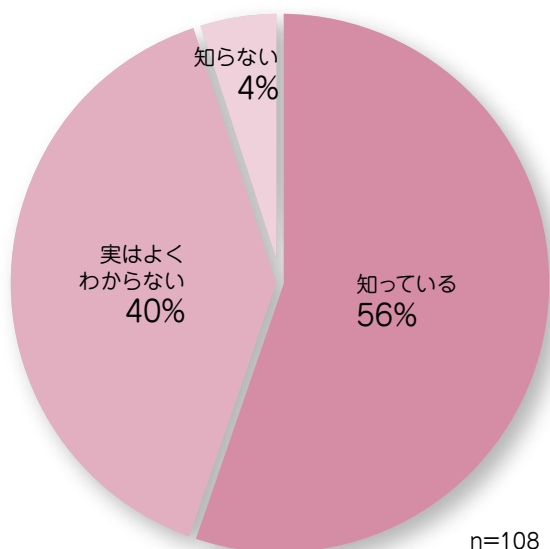
ただ、熱中症の症状なのか、低血糖や高血糖の症状なのかを見分けて対処することは難しく、45%がどう指導したらよいか「実



n = 108

はわからない」、「知らない」と答えています。自由記述では、「冷房は体に良くないと思っている人が意外に多い」、「高齢者は体温調節の衰えて暑さを感じにくくなるから感覚に頼る判断は危ない」、「尿の回数や色を見て脱水状態をチェックするよう指導している」など多くのご意見をいただきました。

## Q. 熱中症と低血糖・高血糖を見分けてどう対処すべきかご存知ですか？



n=108

## Q. 夏の運動療法はどのように指導していますか？

(複数回答可 n=108)

朝晩の涼しい時間帯に行く	93%
室内で行う	34%
運動内容を変えて行う	33%
実施時間を減らして行う	19%
運動療法は休止する	5%
いつもどおり行う	4%
わからない	1%
その他	5%